

シンプル・ライフは希望たりうるか

—M. グリッグスビー『お金ではなく時間をかけて生きる：ボランタリーシンプリシティ・ムーブメント』—

伊藤 すみれ

Mary Grigsby

Buying Time and Getting by: Voluntary Simplicity Movement

(Albany: State University of New York Press, 2004)

Sumire ITO

1. はじめに

1990年代初頭から、アメリカやヨーロッパの先進諸国では「ダウンシフターズ」と呼ばれる人々や「ボランタリー・シンプリシティ」運動といったものに焦点を当てた研究が消費文化や心理学の分野で現われている。ダウンシフターズは、「定年退職以外で、自ら収入水準とそれに伴う消費水準が恒久的に下がるような生活スタイルの変化を選んだ人々」(Hamilton 2003)と定義される。ボランタリー・シンプリシティ運動はそのよりラディカルな発現であり、たくさん消費するライフスタイルを拒否し、消費程度は低いクオリティ・オブ・ライフ(以下 QOL)の高い新たな生活を探し求める動きとして理解される(Alexander and Ussher 2012)。彼らは労働時間を減らし普通よりも少ない収入を得^①、自分で野菜を育てたり服を作ったりして、お金のかからない生活を送っている(Alexander 2011)。さらに自発的なサークルも形成され、アメリカ各地でシンプリシティについてのワークショップが行われている。こういった動きの社会的背景には、Shor(1998=2011)が取り上げたような、近年の欧米諸国で顕著に見られるカード破産やとどまることを知らない欲望による恒常的な欠乏感、働きすぎといった問題への関心の高まりがある。ボランタリー・シンプリシティに代表される新たなライフスタイルは、物を買って欲望を満たすことが幸せだとする価値観を問い直し、必要を超えた消費を行うために長時間労働に耐える生活から抜け出す実践だと見ることができる。豊かさについての認識がたえず問い直される日本において、ボランタリー・シンプリシティについて知ることは、現代をよりよく理解するうえでのヒントとなるだろう。

2. 本書の位置づけ

ボランティア・シンプリシティについて本書より前に行われた研究には、Leonard-Barton(1981)、Etzioni(1998)やShor(1998=2011)などがある。これらの中ではボランティア・シンプリシティは脱物質主義的・反消費主義的な価値の実践として位置づけられた。いずれの研究もその意義として、現代の先進国に住む人々が直面している働きすぎとそれに伴う QOL の低下、また貧困・格差問題や環境問題といったグローバルな課題を同時に解決しうる可能性をそこに見出している。しかしそういった視角が研究の幅を狭めるということも事実であり、ボランティア・シンプリシティ運動を実際以上に理想的なものとして描き出しているという側面は否めない。一方マーケティングの領域においては、消費行動としてボランティア・シンプリシティを見るものも存在するが(Craig-Lees and Hill 2002)、そのような研究はボランティア・シンプリシティの社会的な意味については論じていない。また、主に経済学や心理学などの領域で論じられてきたため量的な調査や意識調査が用いられることが多く、その文化・社会運動的側面や参加者の主観的な経験や運動の詳細なダイナミズムはほとんど分かっていなかった。

本書は、ボランティア・シンプリシティ運動に接近し、運動に携わる人々の考え方や経験、たとえばなぜボランティア・シンプリシティを受け入れているのか、実際にどういった実践を行っているのかといったことを明らかにすることで、それについて深く理解しようとする試みである。それによって同時に人種や階級、ジェンダーといった観点から文化・社会運動研究に貢献することができると著者の Grigsby は考えている。ボランティア・シンプリシティ運動をより詳細に観察し、データからでは読み取ることの難しい運動参加者の深い心理的な洞察や組織のあり方についての知見を得ている点で、本書は貴重な研究である。

最後に、現在のボランティア・シンプリシティ研究を概観しておこう。心理学者の Kasser は、脱物質主義的な価値観や環境にやさしい行動と主体的幸福感の間に相関関係があると指摘する。そして両者ともに高い人においては本質的価値(個人の成長・関係性・コミュニティへの関与)を外在的価値(金銭的成功・イメージ・人気)より重視するという指標、自身の内的な状況や行動に気づきやすいという指標の 2 つが高く、ボランティア・シンプリシティ的なライフスタイルがそれに寄与するという結果が出ている(Kasser and Brown 2005, Kasser et al. 2014)。また、Alexander and Ussher(2012)はインターネット上での調査を行ってシンプル・リバーズがシンプリシティを選択した動機や直面している困難などについて明らかにしている。それによれば、動機として環境問題への意識を解答した人が最も多く、健康意識や自己充足感が続く。実証的研究の必要性が認知される中で(McDonald et al. 2006)質的調査も行われてはいるものの、未だ本書を超えるボランティア・シンプリシティの本質に迫る洞察には至っていない。したがって出版から 10 年が経過した現在でも、本書を読み解くことはボランティア・シンプリシティを理解するうえで非常に重要であろう。

3. 著者紹介

Mary Grigsby はミズーリ大学で修士号・博士号を取得し、2000 年から同大学農村社会学部の教員として社会学や農村社会学を教えている。専門は文化社会学、組織社会学、農村社会学である。近年の主な著作にはアメリカの大学生が自らの教育経験をどのように捉えているかを明らかにした *College Life through the Eyes of Students* (2009) や、伝統的に素手で魚を捕り暮らすヌードラーズの文化をエスノグラフィー的に記述した *Noodlers in Missouri: Fishing for Identity in a Rural Subculture* (2012) などがある。いずれにおいても、Grigsby が本当に描き出そうとしているのは対象そのものよりもむしろ、彼らのアイデンティティ形成がどのようにジェンダー、人種、民族、階級と関連しているかということである。

本書は博士論文を本としてまとめ出版したもので、こういった後の研究に一貫して引き継がれていく彼女の関心を、ボランタリー・シンプリシティを題材にして追求したものと見ることができる。指導教官の Mary J. Neits は近年魔術におけるジェンダーについての研究を行っており、Grigsby の関心もその影響を受けてジェンダーに引き寄せられている。また、Grigsby 自身非常にこの運動に共感し、自分でワークショップも企画している。しかし同時に違和感や疑問をも覚えたと述べており、一歩引いてボランタリー・シンプリシティ運動を眺め、その違和感や疑問を追求しようとする姿勢が見られる。

4. 本書の概要

本書は以下の 6 章から成り立っている。

1. Voluntary Simplicity: A Cultural Movement
2. The Ecological Ethic and the Spirit of Voluntary Simplicity
3. Getting a Life: Constructing a Moral Identity in the Voluntary Simplicity Movement
4. Gendered Visions of Process, Power, and Community in the Voluntary Simplicity Movement
5. Looking into the Shadows: The politics of Class, Gender, and Race/Ethnicity in the Voluntary Simplicity Movement
6. New Tools and Old: Transformation and Reproduction in the Voluntary Simplicity Movement

1 章と 6 章はそれぞれ導入と結論にあたる。2 章では代表的なハウツー本の分析を通してボランタリー・シンプリシティがどのような運動かということを概観している。3 章から 5 章においては 3 つのシンプリシティ・サークルへの参与観察と 14 人の参加者へのインタビューによって、参加者のアイデンティティの形成(3 章)、意識やふるまいがどのようにジェンダー化さ

れているか(4章)、人種・民族、階級、ジェンダーといった構造的不平等についての意識(5章)が詳しく描かれる。この章では節ごとに3章から5章の内容をそれぞれ紹介していきたい。

4.1. アイデンティティ

ボランティア・シンプリシティに関わるのはどういった人々であり、彼らはシンプリシティについてどのように考えているのだろうか。属性から見てみると、多くの文献から指摘されているように多くは中流階級出身の白人である。また女性の方が男性よりも多い。著者がインタビューしたうちの少なくとも2人は、大きな痛みを伴う下降を経験しており、部分的にはあれ中流階級としてのアイデンティティを保つためにシンプリシティを利用している。

彼らは、環境問題や貧困問題といった様々な社会問題の根底にあるのは稼ぐことと消費することを是とする価値観やライフスタイルであると考え、それに捉われている「消費者ゾンビ」(p. 53)や「地位志向のキャリア主義者」(p. 53)を批判する。そのことによって、自分たちは環境意識が高く、真の自己、真の満足というものを見出しており、支配的な文化・システムに捉えられている人より一段上にいると考えることで文化的・象徴的なアドバンテージを得ようとする。シンプリシティ運動はそういった点でSchwalbe(1996)のいう「アイデンティティ・ワーク」^②であり、またそのような意識から自分たちが文化的変化の主体であるという責任感が生まれている。

シンプリシティを選択する背景として、ほとんどの人はいったん必要以上の豊かさを経験し、物質的な豊かさは真の満足をもたらさないことに気づいたという語りをする。その点で、自分たちは物質的な豊かさが幸せをもたらすと信じている貧しい人々とは異なると考えている(p. 59)。

また、シンプリシティ・リバーズの中でも男女によって異なるアイデンティティ・ワークが求められている。ボランティア・シンプリシティを実践し始めた動機についてのインタビューを見ていこう。インタビュー対象者のひとり、Emilyは次のように述べる。

それは自分の人生について、仕事からの自由という以上の新たな所有権を与えてくれたように感じます。もちろん仕事はその一部ではありますが、人生をこれまでと違った風に考えるようになりました。一度自分のお金の使い方を考えると、他のたくさんのことについてもうすべきかが分かったように思います。(p. 67)

女性は支配的文化の制約の中で感じていた居心地の悪さから解放され、自律性と喜びを得たということに主眼を置く。また、ぬいぐるみを集めたり壊れかけの家具を捨てられなかったりした過去を語り、自分は過度な消費者だったと振り返る傾向にある。そして日々の生活について語るときには、関係性や親密さ、日々の実践に関する言葉を用いる。女性の中ではコミュニティを形成する力、創造的で実際の活動によって地位が決まり、その関心は日々どのように協力しあって生活するかに置かれる。Nitaが縫物のコミュニティについて述べた言葉を見てみよう。

自分が既に服を持っているのに常に新しいものを作ったり直したりしていることに罪悪感を覚えることもあります。でも友人が「そういう風に考えるべきじゃないわ。それは服というよりもあなたの美的な表現でしょう。」と言ってくれて気が楽になりました、やはり少し馬鹿げてはいるのだけれど。でも私は布や生地を使って何かをするのがとても好きです。自分で着ることができるし、それに人を招いて話すことになるから。私のことを知らない人でもここに来ておしゃべりするんです。それに私が着る服はある意味で挨拶にもなっていて、何も言わなくても私がどんな人かについてたくさんのことを伝えてくれます。もっと多くの人が服を作って、それぞれに違った着こなしができれば……人々のことをよりよく知ることができるので、それは本当にコミュニティを作ることになると思います。(p. 77)

一方、男性は動機について強調する点は異なる。Roger は自分がボランタリー・シンプリシティに加わったきっかけを以下のように話す。

私は既に自分がそういった生活を送っているということに気づいていました。そして、ボランタリー・シンプリシティのことを聞いたときに『それは面白そうだ！私と同じ考えの人々に出会えるかもしれない。』と思ったんです。だから、ボランタリー・シンプリシティという考えが好きなのはもともとそれは私のものだったからです。(p. 67)

ここでは、自分は顕示的消費など考えたこともなくずっとシンプルな生活をしており、シンプリシティ運動が自分に追いついたのだという語りが見られる。そして男性は、他の人からの支援については触れることなく、自己抑制をアピールする。Kevin の以下の語りから少し伝わるだろうか。

私は食料品の買い物をするけれど、そのやり方は他の人とは違います。リストがあって、それに載っていないものは、本当に使うものや必要なものを除いては自分で作ります。それが私の買い物の出発点です。調理済みの食品やパッケージ化されたものはごみが出るため買いません。(p. 71)

また以前自分が就いていた地位について詳しく、時に長時間語るのも男性の特徴である。捨てた地位や収入が魅力的なほど、それを捨てることのできた自己抑制力を顕示することができ、サークル内での尊敬を得られるからである。

この男女の違いは、社会構造や発達段階での経験によってアイデンティティの満たされない部分が異なるために生まれると Grigsby は説明する。女性においては関係性が重要視され、私的な場に自己が制限されるため自律性の獲得が男性よりも難しい。このため女性は、アイデンティティ・ワークとしてのボランタリー・シンプリシティの中では自律的であることを強調する。一方男性は他者を支配する力を求められるため、ボランタリー・シンプリシティにおいて

は自己をコントロールする力を得ることが彼らにとって重要となる。

4.2. サークルの中のジェンダーと権力

一方、サークル内部でのふるまいを見ると、彼らが対抗しようとしている価値観に絡めとられている様子がうかがえると Grigsby は指摘する。男性は、シンプル・リバーズとしての自らの専門家的地位を確立させようとする。そして支配的文化や考えない消費者たちとの対立を強調し、それらと戦って公的な場における変革を目指すことを重要視する。「買い物0デー」キャンペーンにサークルが関心を持たなかったことに落胆する Kevin の言葉を引用しよう。

話し合いの中で交わされた意見を行動に移すべきかどうかというのは今まで何回か議論されてきたけれど、私たちのグループは常にそうすべきではない、それぞれのやり方を尊重した方がいいとしてきました。…(中略)…「買い物0デー」がそのいい例です。何人かは「買い物0デー」に関わっていましたが、他の人にそれを強要はしなかった……彼らはグループとして何かアクションに参加するということには決して賛成しませんね。(p. 104)

一方で女性も、日々どのように協力しあって生きていくかに関心を持つ。この違いのために、最初は女性のメンバーの方が多かったサークルが次第に男性によって支配されるようになる。男性が議題を決め、関係性を競争的なものに引き戻し、自らを専門家として確立しようとするのである。Grigsby はこの理由を社会構造における男性の優位、ジェンダーに関する文化的なレパートリーと適切な組織モデルの欠如、発達段階での経験の違い、ジェンダーの重要性についての認識の薄さに求める。アメリカの主流文化においては男性らしさ——競争的・支配的であること——が良いものとされるが、男性はそれを問い直し、女性らしさ——協力的・支援的であること——に価値を置きたいと口では言う。そのような意識にも関わらず、実際の行動は競争的・支配的な価値にしたがっているのである。

サークル内部では、貯金と投資で十分快適に生きることができ働かなくて済むような状態を目指す「金銭的自立」を得た人がロールモデルとして尊敬され、彼らの自分がいかに不必要な消費を減らしたかというストーリーが人々に共有される。

サークルはだいたい近況報告に始まり、次にいくつかのグループに分かれてこの間どんなことがあったかを互いに話す「チェックイン」という時間を持つ。その後読書会があれば読書会を行うといった形で進んでいく。Grigsby が観察した3つのサークルはどれも、ボランティア・シンプリシティに関する権威である Cecil Andrew が提唱したグループモデルに基づいている。それは、リーダーを持たず全員が同程度話し、聞き、誰も他の人を判断したり非難したりしないような状態を理想とするモデルである。しかし、長期間そのモデル通りにサークルが運営されていくことは珍しいと Grigsby は言う。離れていく人々は、それをサークルのせいではなく方向性が違ったからだと考える。サークルを辞めた Emily の語りがそれをよく表している。

サークルではお金ばかりに重点が置かれるようになっていって、私は互いに協力し合えるコ

コミュニティを大事にする方がいいなと感じました。…(中略)…お金を払って庭や畑に水をやってくれる人を頼むよりも、水をやりに来てくれる友人を持ったり逆に他の人が畑を始めるのを手伝ったり。資本主義的に専門家を雇うんじゃなくて。それが私の関心でした。(p. 97)

Jack のグループはただただ「自分がボランティア・シンプリシティに関わるようになったストーリーを」話しているだけです。すごくたくさんの新しい人が来るので、一度自分のストーリーを話したのに次のときにも新しい人のためにまた同じことを繰り返さなきゃいけない。それで自分のくだらない話をするのに疲れてしまうんです。…(中略)…だいたい 9 時にいつも終わるのですが、9 時になってもチェックインに進めていませんでした。(p. 98)

こういった状況を、男性が新人を引き入れ彼らに影響を与えることで自らを専門家として確立させようとしているのだと Grigsby は見る。

Grigsby が参加したもうひとつのワークショップでも同様の動きがあった。初回はワークショップを企画した団体が進行役を選び、その時に他の男性が次の進行役を申し出た。3 回目には、ある男性が毎週進行役を変えるのをやめようと提案し、もうひとりの男性のメンバーはすぐに賛成した。出席していた 2 人の女性もそれでいいと言い、進行役を務めたいとは思っていないようだった。すぐに賛成しなかったのは Grigsby だけだったが、参与観察者という立場上強く主張することは控えた。こうして、そのワークショップでは男性が優位に立つようになった。7 週間行われたワークショップの最後には、男性は 2 人とも残ったが、もともといた 6 人の女性のうち 3 人が抜けた。辞めた理由は、男性と自分たちの関心が異なったからだと言う。ひとりの女性は、男性は急進的なシンプル・リバーズであり、他の人にも同様の生活を押し付けようとしていたと見ていた。

ここにはリーダーを公式に決めないが実質的にリーダーと追随する者に分かれている状態があり、女性解放運動において指摘されていた権力構造の隠ぺいが起こっていると Grigsby は推測する。また、女性は先に挙げた縫物の会のように、サークルの枠を超えたコミュニティを自分たちで作っている。しかし男性にはそれがないために、サークルという場が人間関係のうえで非常に重要となる。

Grigsby は、ボランティア・シンプリシティ運動の限界の理由を差異の軽視に求める。さきほど見たように、サークル内でも男女によってシンプリシティに関する考え方には大きな違いが存在し、サークルに求めるものも異なる。男性は専門家としての自らの地位を確立させ、主流文化に捉われている人々と自分たちの違いを強調する。またサークルの方向を決めたがる傾向にある。それに比べて女性はより実践を重視するため、男性のやり方に違和感を覚えて離れていく人も多い。しかし、女性にとっても男性にとってもサークルがもたらす支援や社会関係資本は有効であり得難いので、そういった違いに目を向けることをためらいがちである。こうして差異を見ないふりをするために、違いを認識することに基づいた組織的な強固さを達成することができなくなっていると Grigsby は結論づける。

4.3. 構造的不平等に対する認識

前節ではサークル内部での違いの認識が避けられる状況を見てきた。5章では、参加者におけるサークルという枠を超えた差異や構造的不平等の認識を検討している。

シンプル・リバーズの多くは自らが白人の中流階級、また高いレベルの教育を受けているということを認識している。しかしそうでない人々との付き合いもあり、偏見は持っていないと主張する。実際に彼らの多くはソーシャル・ワーカーや教師、ホームレスのシェルターのスタッフとして働いていて、より不利な立場にある人と日常的に関わっている。むしろ、彼らはそのためにかえって人種や階級の違いの重要性を否定するのである。Nitaの「もしあなたのクラスの生徒はみんな黒人ですかと聞かれたら、『ええと、明日見てみます』と答えるわ、だって彼らの肌の色を本当に覚えていないから(笑い声)。でも多分友人の多くはあなたの言う標準的な白人でしょうね。」(p. 122)という言葉がその様子をよく表している。彼らは差異を瑣末なものと捉えており、白人とそうでない人々の間の非対称な関係性を自覚していない。また、Kevinの「多くの人に『どうやって消費せずにやっていけるの?』と聞かれますが、私はこう答えます。豊かな人も貧しい人もゼロから始めるように、またゼロから始めることです、と。」(pp. 126)という表現からは、豊かな人、貧しい人、中流階級みなと同様にシンプリシティを実践することができると思っていることが分かる。すべての人が同じくらい努力すれば同じくらいのものを得ることができ、ボランタリー・シンプリシティが多様な階級や人種・民族に開かれているという平等意識が見られるのである。

そのため、ほとんどが白人・中流階級であるという実態について触れることはなく、尋ねると、その理由を人種・民族の側に見出す。前述のワークショップにおいて唯一の人種的マイノリティだったヒスパニック系の女性は、ラテンアメリカで育った彼女の経験は他の人が語るものと大きく異なるために、グループの人々は自分のものの見方を理解できないのだと感じていた。シンプル・リバーズは、自分たちが構造的に他の人種・民族を抑圧していることや、親の資産から受けている恩恵については無自覚である。また、資本主義そのものに対して批判的な人は少ない。批判的な場合は、企業独占的な現代の資本主義の状況を非難するだけで、私有財産制などについてはない。また、何人かはジェンダーの不平等を問題だと考えているが、自分たち自身にとって重要な問題だとは思っていない。

こういった考え方は、現在優勢の文化的ヒエラルキーの再生産につながっていると Grigsby は主張する。シンプル・リバーズは、自分たちこそが世界の未来にとってどのような選択が適切なのかを知っており、消費主義に捉われている人や貧しくて物質的豊かさを追い求めている人よりも高いレベルの気づきを得ていると考える。そのことで貧困に苦しむことの多い人種・民族的マイノリティや発展途上国の人々よりも上にいるという構図が再び作り出されているのである。

5. 考察

本書について批判すべき点を挙げるとすれば、支配的な価値観＝競争・支配＝男性的、抑圧されている価値観＝協力・関係＝女性的という図式を疑わずに使用しているために女性がシンプル・リバーズにおいて規範的な人々として描かれており、彼女らの姿がかえって見えにくくなっている点である。また、サークルに参加しない人々については触れられていないが、彼らについて知ることがかえって参加する人々の特徴が見えるということもあるだろう。

しかし、対抗文化においてもジェンダー、人種・民族、階級によって不平等な社会関係が再生産されるという事例として意義のある研究であることは間違いない。またシンプリシティとアイデンティティの問題を詳細に描いた点でも興味深い。アイデンティティについては、Honneth(1992=2003)の承認という観点から考えることもできよう。Honneth(1992=2003)は承認を愛や友情に関わる「情緒的気づかい」、法的な権利を認められる「認知的尊重」、仕事などの公的な領域における「社会的価値評価」の3つに分類している。Bauman(1998=2008)の、消費が個人のアイデンティティ形成にとって重要となり、貧しい人々は「消費する能力がない」として倫理的に敗北するという指摘を考慮すれば、シンプル・リバーズは仕事と消費生活の両方において社会的価値評価を得ることが難しいと言える。したがって彼らにとっては、他どのような手段で承認を得るかということが非常に重要となる。情緒的気づかいを受ける場を比較的容易に得ることのできる女性に比べ私的な場での承認を受ける機会の少ない男性の生きづらさが、シンプリシティ運動内部におけるふるまいを決定づけ、そしてそのことがかえって、運動の限界を定めているのだと見るができるだろう。

最後に、現代日本におけるボランタリー・シンプリシティについて考察を行いたい。日本ではシンプリシティそのものに焦点を当てた研究は見られないが、環境思想や消費社会研究との関連で触れられてきた。消費熱や欲望に対する批判的な視点は新しいものではなく、特に現代の消費社会研究においては、間々田(2007)が Inglehart(1977)の「脱物質主義」概念の延長線上に「真物質主義」を見出している。それは、モノと人、自然との関係を良好に保ち、消費量の削減ではなく消費の質の向上を目指す動きである。「断捨離」など、支配的な消費観を問い直すようなシンプリシティブームを真物質主義のひとつの現象と見ることができる。真物質主義とボランタリー・シンプリシティの違いは、消費だけではなく労働についても従来の価値から自由であるところにある。近年、様々な方面から低賃金・長時間労働など悪質な労働環境や非正規雇用の構造的問題が指摘されており(森岡 2005, 本田他 2006, 熊沢 2007)、働き方に対する問題意識の広がりが見られる。従来の消費・欲望に対する批判と現代の働き方への再考が結びついて生まれたのが、ボランタリー・シンプリシティだと言える。

日本版シンプリシティについて考えるうえで、Grigsby が明らかにしたアメリカの状況との比較は興味深い。管見の限り日本ではその実態についての調査はないが、消費と労働をともに減らす暮らしを提唱するハウツー本は書店でも見かけるようになっている。以下、高坂(2010)、伊藤(2012)、pha(2015)⁹⁾の3人のハウツー本から日本のシンプリシティについてアメリカと比較してみたい。

まず、3人の著者はいずれも大卒以上の学歴を持ち、中流階級で文化資本の高い人々が中心となっているという類似点がある。どの著者もいったん正社員として働いた経験を振り返ってその労働と消費の関係への疑問を述べるという点でも Grigsby の描いたアメリカの状況に近い。違いとしては、まず労働環境や消費主義についてより多く述べられ、貧困問題や環境問題への言及は少ないということが挙げられる。また、支配的な文化を競争的だと考える点では同様だが、そこから「降りる」「逃げる」という言葉を用いている点でも異なる。自らを貧困問題や環境問題に意識的な人間と捉える面が全くないわけではないが、それよりも強調されるのは「普通の働き方・生き方をしなくてもいい」ということである。たとえば pha(2015)は、「新卒で正社員として就職しないと一生苦労する」「何歳までに結婚し子どもを作らないと負け組」という、「多くの人が普通にこなせないものを『普通の理想像』としてしまっているから、みんなその理想と現実のギャップで苦しむのだ。そんな現状と合っていない価値観からは逃げていいと思う」(p. 8)と言う。普通の生き方から降りていい、逃げていいといったメッセージが発信される背景にあるのは、一億総中流が前提とされてきた社会における下降への恐怖から来る生きづらさだろう。

Grigsby は深く踏み込んでいないが、運動によって中流階級のアイデンティティを保つことができるということは重要である。シンプル・リバーズの中には辞職を余儀なくされた人も複数いるが、彼らはボランティア・シンプリシティという新たな価値を獲得することで自らのアイデンティティを再構築している。日本版ボランティア・シンプリシティも、高度経済成長期・安定成長期より中流層が少なくなりその多くは「下流化」していく中で、「下降の矜持」を提示してくれると言えよう⁴⁾。若者が「承認の共同体」を得ることによって上昇をあきらめる姿は古市(2010)が描いているが、下降の矜持とは、勝者も相変わらず存在する社会でなぜあきらめるのが他でもないこの自分なのかということに対する肯定的な説明である。アメリカでは、貧困や環境についての意識が高いためにシンプルに生きるのだというストーリーや、サークル内部での位置や人間関係によってそれが得られるのだということを Grigsby は明らかにした。日本でも矜持は求められるが、その具体的な物語は異なる。物語を詳細に検討することや、なぜ異なるのかという問いに答えることは次稿以降の課題としたい。しかし、格差社会という表象自体が人を恐怖や焦燥感に駆り立てているという松田(2008)の指摘からは、我々が長い間下降や貧困を、少なくとも意識のうでで経験してこなかったことが、日本版シンプリシティに影響していると予想できるだろう。こうした現代的な状況を明らかにするために、下降の経験や表象を国際的・歴史的に比較分析することが重要である。

我々は日本的な文脈の中で、もう一度階層・階層移動とアイデンティティの形成の關係に立ち返りそれを編み直していく必要に迫られている。刊行から 10 年が経った現在でも、本書はそのための非常に有益な分析の視点を与えてくれると言えよう。

〈注〉

- (1) Brown and Kasser(2005)が行った調査では、一般的な人々の年収の平均が4万ドルを超えるのに対し、シンプル・リバーズの平均は2万6千ドルほどであるという結果が出ている。
- (2) Schwalbe(1996)によれば、アイデンティティ・ワークとは自分が誰でどういった人なのか、またどのようにふるまい、扱われることを期待するのかを示すすべての行動を指す。ひとりで考えたり書いたりするときにも行われるが、私たちが重要な意味づけを行うのは他者との関わりを通してであるため、多くのアイデンティティ・ワークは双方向的である。
- (3) ここで参照したハウツー本は高坂勝, 2010, 『減速して生きる—ダウンシフターズ—』幻冬舎、伊藤洋志, 2012, 『ナリワイをつくる』東京書籍、pha, 2015, 『持たない幸福論』幻冬舎、の3冊である。代表的なボランタリー・シンプリシティのハウツー本を特定するのは難しいが、高坂(2010)は文庫化されており、伊藤、phaはそれぞれ複数冊著書を出していることからこれらは人気のあるシンプリシティ本と見ていいだろう。
- (4) 今は、下降は高坂(2010)が述べるような会社内での生存競争の激しさや、または未来への不安という形で間接的に経験されるものに過ぎないだろう。しかしシンプリシティに関する本が読まれる背景には、これらが無視できない影響力を持っているということを表していると考えられる。

〈文献〉

- Alexander, Samuel, 2011, “The Voluntary Simplicity Movement: Reimagining the Good Life beyond Consumer Culture”, *International Journal of Environmental, Cultural, Economic, and Social Sustainability*, Vol. 7, No. 3, pp. 133-150.
- Alexander, Samuel and Simon Ussher, 2012, “The Voluntary Simplicity Movement: A multinational survey analysis in theoretical context”, *Journal of Consumer Culture*, Vol. 12, No. 1, pp. 66-86.
- Brown, Kirk Warren and Tim Kasser, 2005, “Are psychological and ecological well-being compatible? The role of values, mindfulness, and lifestyle”, *Social Indicators Research*, Vol. 74, pp. 349-368.
- Ctraig-Lees, Margaret, Constance Hill, 2002, “Understanding Voluntary Simplifiers”, *Psychology & Marketing*, Vol. 19, No. 2, pp.187-210.
- Etzioni, A, 1998, “Voluntary Simplicity: Characterization, select psychological implications, and societal consequences”, *Journal of Economic Psychology*, Vol. 19, pp. 619-643.
- 古市憲寿, 2010, 『希望難民ご一行様: ピースボートと「承認の共同体」幻想』光文社.
- Hamilton, Clive, 2003, *Downshifting in Britain: A sea change in the pursuit of happiness*, Australia Institute.

- 本田由紀, 内藤朝雄, 後藤和智, 2006, 『「ニート」って言うな!』 光文社.
- Honneth, Axel, 1995, *The Struggle for Recognition. The Moral Grammar of Social Conflicts*, Polity Press., (=2003, 山本啓訳『承認をめぐる闘争—社会的コンフリクトの道徳的文法』 法政大学出版局).
- Inglehart, 1977, *The silent revolution: changing values and political styles among Western publics*, Princeton University Press., (=1978, 三宅一郎訳『静かなる革命—政治意識と行動意識の変化—』 東洋経済新報社).
- Kasser, Tim, Katherine L. Rosenblum, Arnold J. Sameroff, Edward L. Deci, Chiristopher P. Niemiec, Richard M. Ryan, Osp Arnadottir, Rod Bond, Helga Dittmar, Nathan Dungan, Susan Hawks, “Changes in materialism, changes in psychological well-being: Evidence from three longitudinal studies and an intervention experiment,” *Motivation and Emotion*, Vol. 38, No. 1, pp. 1-22.
- 熊沢誠, 2007, 『格差社会ニッポンで働くということ—雇用と労働のゆくえをみつめて』 岩波書店.
- Leonard-Barton D, 1981, “Voluntary simplicity lifestyles and energy conservation”, *Journal of Consumer Research*, Vol. 8, pp. 243-252.
- McDonald, Seonaidh, Caroline J. Oates, C. William Young and Kumju Hwang, 2006, “Toward Sustainable consumption: researching voluntary simplifiers”, *Psychology & Marketing*, Vol. 23, No.6, pp. 515-534.
- 間々田孝夫, 2007, 『第三の消費社会論—モダンでもポストモダンでもなく—』 ミネルヴァ書房.
- 松田いりあ, 2008, 「消費社会と自己アイデンティティ—Z.バウマン・フレキシビリティ・商品化—」 『社会学評論』 59 卷 1 号, pp. 186-197.
- 森岡孝二, 2005, 『働きすぎの時代』 岩波書店.
- Shor, Juliet B, 1998, *The Overspent American: Upscaling, Downshifting, and the New Consumer*, Basic Books., (=2011, 森岡孝二監訳『浪費するアメリカ人—なぜいらぬものまでほしがるか—』 岩波書店).
- Schwalbe, 1996, *Unlocking the Iron Cage: The Men's Movement, Gender Politics, and American Culture*. New York: Oxford University Press.